

淨土論に於ける自利利他の問題

二 村 龍 華

一

私の茲に述べんとする所は、自利利他の問題である。

自他の問題は、時代を問わず人間の社會生活のあるところ常につきまとうている最も古い問題でありつつ、今もつて人間を悩んでいる新しい問題と言える。私はこの問題が天親菩薩の淨土論に於いて云何様に論述されているかに就いて考えてみ度い。

天親菩薩は、初めは小乗佛教に意をよせられていたが、兄無著の切實な教化に遇うて、遂には大乘佛教に轉換せられたと傳える。而して最後の安住の場所は、攝大乘論釋や願生偈に依れば、西方願生にあつたことは明かなことである。天親の小乗から大乘、大乘中にあつては更らに誓願佛一乘に轉じて行かれた一生涯を思うとき、小乗的自利から大乘的自利利他に至つて、人間の立場よ

り生ずる避け難き矛盾に撞着して、遂に如來の本願力に於いて、この問題の解決を見出されたと言ふことが出来る。

この問題の前に、私の考え度いことは淨土に往生すると言ふことである。天親菩薩の言われる如く、何故人間は淨土に生れなければ人間となれないのであろうか。それは、淨土が人間の「本土」であるからである。しかし、淨土がどうして人間の本土であると言えようか。人間が人間の立場にある限り、そこからは淨土が人間の本土であると言ふことは出て來ない。されど一度佛の願力に遇うと、それまでは言えなかつたのであるが、人間の本土は淨土であることが自然に感じられて來る。否、淨土以外に人間の本土はないことを感ぜざるを得ないのである。而して、人間は何の眞實をも知らないで、無始以來今日に至るまで生死輪轉の生活を持續して來たこと

を知らしめられる。天親菩薩は、淨土論の中に「彼の世界の相を觀するに三界の道に勝過せり」と頌している。

併し、淨土と三界とが並列的にあるのではなく、淨土にふれると吾々の生活が三界として照し出されるのである。曇鸞大師は、論の性功德を釋する中に、性は本義、言は、此淨土隨順法性不乖法本と述べている。これによると、淨土とは法性又は法本そのものでないが、

それに隨順し乖かないものであると言える。大無量壽經に國如泥洹とあると同じ意味であらう。この點より考へると、淨土はあらゆる法の本性を人間の煩惱に依つてかたどる所の莊嚴功德界である。かくて淨土は人間のみでなく、一切のものの本土であると言える。こういう意味で、本土を迷い出た人間が人間となるには、先ず第一に自らの本土たる淨土に歸らねばならぬ。この自明の事柄は、多くの先覺者によつて歴史的に明かにせられてあつても、今日尙充分に認められているとは言えないのである。

さて、天親菩薩は淨土に願生して失うた一如法性を、云何様に取り戻さんとせられたのであらうか。

天親菩薩の淨土論は、その名無量壽經優婆塞持舍願生偈の示めすように、無量壽經に説く如來の眞實功德相に相

應せる優婆塞持舍である。この論は、偈頌と長行とからなる。偈頌は無量壽經章句を惣説せるもの、長行は偈頌のもつ意義を解説したものである。言を換へると、無量壽經所説の眞實功德相によつて、願生の原理とその意義とを説かんとするものであらう。天親菩薩の願生とは、五念門の行を修して如來の眞實功德相を産み出す原理にふれんとするものに外ならぬ。

五念門の行とは、禮拜・讚嘆・作願・觀察・廻向である。論の解説分の説相から見ると、五念門の中その中心となるものは、作願・觀察の二門と言うことが出來よう。その解義によると、安樂國に往生せんと念うのは、實の如く奢摩多・毘婆舍那を修せんと欲するが故にとある。天親菩薩は、小乗から大乘に轉じその止觀の行を修して、見失うた一如法性の本來の世界に歸らんと企圖せられたのであらうが、しかし、その成就は人間の立場に於いては成り立たず、本願の淨土に往生して始めて成滿することを見られたのであらう。

それでは、淨土に往生すれば、云何にして人間に到底成就しない止觀の行が、行じられるようになるのであらうか。天親菩薩は、論の果の五功德門中、第三宅門の下では入第三門者以下一心專念作願生彼修奢摩多寂靜三

味^ミ行^ユと述べている。この敘述によると、奢摩多是寂靜三昧である。寂靜三昧の語は、吾々に大無量壽經の其心寂靜^{ニシテ}志無^シ所^{スル}著^{スル}。一切世間^ニ無^シ能^ク及^ス者^ノの經文を思い起さしめる。其心寂靜にして志著する所なし(止)は、正しく天親の長い問求めて得られなかつた奢摩多の行を、大經の法藏菩薩の上に始めて見出したのであろうか。其の心が寂靜無相であるのは、人間の所著を超えているからである。この語を思うと、天親の作願心は、人間の作願心を超えて如來の作願心に相應せるものなることを知る。人間の奢摩多が法藏の願心に結びつく處に、成就する如く、得^テ到^ルニ^ニ彼所^ニ受^スニ^ニ用種々法味樂^ヲる毘婆舍那の成ぜられることも、同じく法藏の願力によることは必然である。一言で云うと、天親菩薩の企圖する止觀の成就は、人間を超えた如來の願力即眞實功德相の原理としての願心に乗ずる外ないのである。この意味を明かにするために、天親菩薩の眞實功德相の解義に就いて考えてみよう。

天親菩薩は長行の中に於いて、眞實功德相を開いて二十九種莊嚴とする。その中、國土莊嚴は十七種、佛莊嚴は八種、菩薩莊嚴は四種である。如來の眞實功德相を三種に開いたのは、何のためか。元より、人間の不實の功

徳を照らし出す如來の功德不可思議なるを咨嗟する意味のあることは言うまでもないであろうが、かく讚嘆しつつ、吾々の淨土に生れる原理の何んであるかを、標示せんがためであろう。古來より言われる如く、二十九種莊嚴の中その中核となるものは佛莊嚴の最後の不虛作住持功德である。佛莊嚴は、もと國土莊嚴の中に既に淨土の徳として説かれてあるが、それが、國土の中から淨土の主體として開かれたものである。菩薩莊嚴とは、佛莊嚴から衆生界に還來する如來のはたらきを展開したものである。この意味で、佛莊嚴に國土莊嚴も菩薩莊嚴も攝めることが出來て、不虛作住持功德が最も根本的なものとなる。このことは、天親菩薩の此三種成就願心^ヲ莊嚴の一語が最もよく顯わしている。更らに、天親菩薩は三種莊嚴を二種清淨世間としている。二種とは、器世間と衆生世間とである。前者は依報、後者は正報、正報は又主伴に分かたれる。この意味は、前と同じく依正主伴として淨土の主體を明らかにして、願生原理としての如來の本願力を彰わさんとせられたものでないであろうか。

この本願力を受取つたのが、曇鸞大師である。大師は論の結語の文の註釋に十八・十一・二十二の三願を的證せられた。この三願は、天親菩薩の本願力を四十八願に

求めたのである。求めていくとき、手掛とせられたものは天親の五念門である。五念門をもつて、四十八願の中から選び取つたものが三願である。三願は單に四十八願の中のものとなく、これらを代表する三願であろう。今三願を五念門に當てると、禮拜讚歎の二門は十八願の念佛に、作願觀察の二門は十一願の證に、第五門は二十二願の普賢の行に相當する。かく五念門の行を三願に當てると、その相應せんとする對象は三願となる。天親菩薩の相應對象の眞實功德相の原理は願心であるから、これを開いた三種莊嚴にも、同じく三願を割當ることが出来る。國土莊嚴と佛莊嚴とは十八・十一の二願に、菩薩莊嚴は二十二願に當てることが出来る。

このように、曇鸞大師が四十八願中、三願若しくは十七願を加えて四願を選ばれたのは、天親菩薩の五念門の行を以て眞實功德相に相應せんとする宗教は、畢竟如來の四十八願に、否三願に、否第十八願に相應せんとする宗教なることの基礎を開かれたと言える。後の善導法然は、曇鸞を経て十八願をもつて四十八願を代表せしめて、天親曇鸞の意を一層明かにせられたと言えるが、親鸞に至ると、又曇鸞に歸つて十八願の意味を明かにするために、三願から更に八願に開かれたのであろう。二

十九種莊嚴が不虛住持功德に攝まるとは、本願を以つて見ると四十八願が第十八願に代表せられることであり、不虛住持功德が三種莊嚴に開かれることは、十八願が三願に開かれ更に四十八願に開かれることを意味する。親鸞が銘文に於いて眞實功德相を誓願の尊号と言われる意も、四十八願を十八願に代表せしめる法然上人の教を守つて、天親菩薩の意にふれられたのであろう。

人間が人間となる第一條件の、淨土に生れると云うことは、天親菩薩によると、五念門の行を修して修多羅眞實功德相の原理である本願力に遇うと云うことである。さて、本願に遇うことが、如何にして人間の見失うてゐる法性を取り戻すことになるのであろうか。

天親菩薩は、不虛住持功德の下に於いて、見_ミ彼佛_ハ未證淨心_ニ菩薩畢竟_ニ得_テ證_{スルコトヲ}平等法身_ニ與_ニ淨心_ニ菩薩與_ニ上地_ニ諸菩薩_ニ畢竟_ニ同得_ニ寂滅平等_ニ故_ニと述べている。偈頌の觀が見となつてゐる。解義分の初めの願偈大意のところにも、見佛とある。觀經にも、觀と見とは區別してある。佛を見ることは、どうして可能か。曇鸞大師は、註の下卷に願生に對して疑問を提出している。生は有の本衆累の元であるから、寧ろ厭い捨つべきである。何が爲に更に生を求めるのか。この疑問を解くために、彼

の淨土の莊嚴功德を觀するのである。淨土の莊嚴を觀すると、この疑問が除かれるのは、淨土は阿彌陀如來の清淨本願無生の生であつて、三有虛妄の生ではないからである。更らに、その理由として法性清淨にして畢竟無生だからであると解釋している。

茲に注意すべきことは、法性には無生とあつて本願には無生の生とあることである。何故、本願の場合は無生の生とあるのか。無生の生とは、それ自身矛盾した語である。しかし、この矛盾が淨土に生れると言う意味であつて、同時に法性を證することである。人間の法性を失える立場の生は、輪轉の生死に過ぎない。淨土に生れると言うことは、失つてゐる無生無滅の法性が生となることである。生と言うても、何處から生れ何處へ死んで行くか分らないような生死ではなくして、生滅の時間を超えた限定して見ようもないものが、人間の上に成就することである。本願と言うとき、既にそれだけの限定がある。一如法性と言うと、生滅を超えて本來無相であり、無生無滅であるが、しかし決して抽象的な理念ではない。若し抽象的な觀念であるならば、それは既に一つの限定としての觀念に過ぎぬ。佛教で言う法性と言うは、かかる觀念を意味しない。佛智即ち本願の智慧を通して

知り得る絶對である。之を缺けば、一切は山崩れしてしまつてばらばらとなる。斯う言うより外ない本來の實在である。如來の本願とは、この實在の生死界に於ける力用である。本願はそれだけの限定はあるが、しかし本來の無相を失うたものではない。この點で法性も本願も無生であるが、その無生が衆生の上に生となるのが本願である。親鸞の言う信樂開發の時尅の極促である。無時間が時間となることである。一如は生とも滅とも言わなければならないが、人間にはこれを失うてゐると言う事實があるから、それを取り戻すこと即ち生がなければならぬ。この生が歴史となる。生滅の世界からは、不生不滅の世界は絶ち切られてあるが、絶對一如は、無相の故に相ならざるはない。無は有となつて、しかも本來の無を自覺せしめることが出来る。これを無生の生と言う。清淨本願のみがこれをなし得る。本願とは一如の本願故に、これに乗することが無始以來の虛妄の有を超えて、淨土莊嚴の妙有に於いて絶對の無即一如に攝め取られることになる。これを生を得と言う。

人間が人間となることは、淨土に生れて失つてゐる法性を取り戻すことであると述べたのであるが、吾々の取りあげた自利利他の問題も、法性を離れて成り立たな

い。夫故、淨土で寂滅平等の法性を得證することは、自利利他を成ぜしめる原理を得ることである。吾々は、天親菩薩の論の中にこの問題をきいて見よう。

自他を分離する觀念は、何處から生ずるか。天親菩薩の論によると、我心貧著自身に依つて自己以外を他とすることに基づく。而して、自他で一切を表わす。一度自他が分離しその間に連りがなくなると、自分と他の一切との間は切斷されてしまう。何時の間にか、このようになつてゐるのが人間の日常意識である。この意識状態を、本來から言うると自他を繋いでいる紐帶とも言うべきものが、何處かへ消えたのである。かくて、人間は凡てを超え超えているから凡てを攝取する最も根本的なものを、失うことを知らずして失うのである。この失つたものが、佛教で言うると一如であり法性である。如來とはその力用である。かく一如を失うたから、自他の關係が混乱に陥るのである。佛教の小乘・大乘・佛一乘の別もこの自他の問題をあらわすと言えよう。

天親菩薩の論の中で、自利利他の語が使用されてある箇所を挙げると、第一文、略説^{シテ}阿彌陀佛國十七種莊嚴成就^{スルコトヲ}。示^シ現^ト如來自身利益大功德力成就^{スルコトヲ}利他功德成就^{スルコトヲ}。第二文、略説^{シテ}八句。示^シ現^ト如來自利利他功德莊嚴次第

成就^{スルコトヲ}。應^ル知^ル。第三文、菩薩如^ク是修^ス五念門^ヲ行^フ自利利他速^ニ得^ル成就^{スルコトヲ}。阿耨多羅三藐三菩提^ヲ。故^ニ。である。第一第二の文は、如來の自利利他の功德成就を説くものであるのに對して、第三文は願生行者の得る所の自利利他の功德成就である。第三文の前に、因の五念門行に依つて得る所の五功德門の解説がある。それによると五功德門が入出の範疇で分類してある。入出とは、自利利他と同意義を表わす語である。このことは、五功德門を菩薩入^ニ四種門^ニ自利行成就^{スルコトヲ}。應^ル知^ル。菩薩出^ニ第五門^ニ迴向利益他行成就^{スルコトヲ}。應^ル知^ル。と結んであることで明かである。この解説によると、五念門の行は二乗の如き自利のみを願うものではなくして、自利利他満足する願生行であることを知る。

佛に於ける自利利他は、どんな意味を持つのか。如來とは、他即ち衆生を利益する外にない。衆生の外に自分がないから、自利は利他利他は自利自利利他一體が如來である。

二十九種莊嚴を自利利他から見ると、國土莊嚴の中、初めから十六句までは自利、最後の一句は利他。佛莊嚴の中、初めから七句までは自利、最後の一句は利他の德を顯わすと言うことも、論文の當相からは一應は言

えようが、曇鸞大師が國土莊嚴の終りの註に、是故十七種雖^モ曰^フ自利他^ト、自利之義炳然^{ナリ}、可^レ知^ル。と釋せられる意味を推しひろげると、二十九種全體が如來の利他の徳であつて、同時にそのまま自利の徳となる。偈頌の正道大慈悲出生善根^{ヨリズ}の文も、この意味を充分に顯わしていると言へるが、論の眼目たる三種成就願心莊嚴の語は、最も明瞭にこの意味を示めしていると言へる。曇鸞大師は之を淨入願心と呼び、この下に諸佛菩薩に二種の法身ありと述べ、菩薩若不^レ知^ル廣略相入^ヲ、則^チ不^レ能^ハ自利利他^ニと結んでいる。曇鸞大師が二法身觀を述べたのは、如來の意味を明かにせんがためである。曇鸞大師は三種莊嚴は法性に隨順し法本に乖かすと説くが、こう言へるのは淨土の莊嚴が願心に基づくことを意味する。何故ならば、如來の願心は一如の力用であるからである。淨土の莊嚴が法本にそむかないと言ふのは、一定の限定をもちつつしかも本來の一如性空無性を失わないことを言う。それ故、淨土の莊嚴は生れ來るものに、失つてゐる一如性を取り戻さしめるはたらきをもつ。無より來た如來は、有に着せる衆生を、虛妄の有に相對する妙有の莊嚴を通して本來の國に歸らしめる。こう言う力用を持つたものが如來の願心である。願心は一方では一如の世界に屬しつ

つ、他方虛妄の有の世界に屬している。兩界に屬することに依つて、淨土を莊嚴して廣(方便法身)略(法性法身)相入することが出来る。廣略相入せしめる原理は、一如の願心の外にない。願心は、自他を超えて自他一切を攝取する空無性である故に、人間の如く自利利他が矛盾しないで一體となる。

菩薩(願生行者)の自利利他はどんな意味か。如來の如く、自利利他一體となることが出来るであらうか。曇鸞大師は菩薩若不^レ知^ル廣略相入^ヲ、則^チ不^レ能^ハ自利利他^ニと註している。吾々は「若」の文字に注意しよう。若しとは假定である。假りに若し廣略相入を知らざれば、言い換へると如來の智慧と慈悲との相關々係を、否如來の願心を知らなかつたら、自利利他に能はずと言ふのである。若し人間に如來の願心が加わらなかつたら、一如を失へる咎の故に、自利利他は矛盾して成就しないのである。天親菩薩の五念門の行は、前に言つたように自利利他を成滿せんとする行であるが、曇鸞大師によると、それを速得成就せしめるものは三願である。的證した三願も又自利利他の意をもつ。それは人間の自利利他を成就せしめる原理だからである。十八・十一の二願は自利(往相)、二十二願は利他(還相)を顯わしている。三願を

以つて四十八願を攝めると、本願を超發する一如の願心それ自體が、自利利他の根本と言う意味がある。かく思うと、論に於ける菩薩の自利利他は、佛の自利利他に依つて成り立つことを知る。このことに眼をつけられたのは、曇鸞大師である。

吾々の考え方からすると、本土を離れて一如を失つた人間には、自利利他の語は使用出来ないのであるが、論には菩薩の場合にも、佛と同様に自利利他の語が用いてある。この解釋として、曇鸞大師は利他の語に深義即ち佛力を讀まれたのである。

さて、同じ菩提流支の翻譯の經典の中にも亦他の經典の中にも、自利利他の譯語がある。曇鸞大師が利他と他利の語に眼をつけられたのは、論に於いて天親菩薩と同じく如來の願心に遇うたからであろう。論の説き方からは、五念門の行は人間の立場に於けるものであるが、曇鸞は天親の底意を得て、往生の行の因も果も願力廻向と受け取られた。この意味を利他の語の上に讀んで、利他と他利の區別を獨自の創意を以つて釋せられた。このことは親鸞にも、深い感銘を與えている。

他利の語は衆生の立場から言う語、利他は如來の立場から言う語とする。宗教的原理は如來の願心の外にない

から、衆生の立場からは他利は衆生が利せられる意となる。人間には、衆生を利する力はないからである。利他は如來のみが、衆生を利する力用をもつことを顯す。如來は、無相の故に相ならざるはないからである。かく他利と區別して利他は佛力を彰わす語とすれば、人間の上には使用することは許されない筈であるが、論では菩薩の上に用いて而も速の字が加えてある。これは何を意味するか。

曇鸞大師は阿彌陀佛の二法身觀を述べる所に、阿彌陀佛と言わずに諸佛菩薩と言うのである。親鸞は唯信鈔文意には、佛について二種の法身ましますと言ひ替えている。その意味は諸佛菩薩は彌陀の願力に依つて、始めて諸佛菩薩たらしめられることを彰わさんとするのではないであろうか。今も願生行者の上に用うべからざる本願の自利利他の語が用いてあるのは、之によつて如來の本願は衆生の上にのみ成就することを言わんとするのである。眞實の宗教には、衆生と無關係であつたり飛躍があつてはならぬ。如來自らが、衆生となつて衆生を超えしめるのである。このように、如來の語が衆生の中に用いられると言うことは、淨土の眞實の宗教は何の飛躍もない最具體的宗教であることを、文章の中に彰わしてい

ると言える。親鸞によつて、同一の文章の訓點が替えられることは、人間の知性は元より無始以來の宿業を超えしめる宗教の具體的原理を、文字を以つて語らしめるのであろう。

吾々は、上に曇鸞大師に依つて利他は佛力なることを知つたのであるが。大師のかく見られた據所は、何處であらうか。

自他の問題を説く鍵は、自にあるのではなくして他の上にあると言えないか。自が問題となつて來るのは、他と交渉する所に起るからである。五念門で云うと、第五の廻向門に於いて利他せんとする所に、自利が切實な問題となる。この意味で、佛力でなければ、利他は成就しないと云う過程を展開するのは、廻向門である。曇鸞大師の利他の深義の據所を問うとき、元より論の眼目である不虛住持功德の本願力を基底として、論全體を見ることを除外しては考えられないが、正しく利他を佛力と見なければならぬ過程、言い換えると未證淨心の菩薩が見佛によつて淨心の菩薩とならしめられる如來の廻向行相を述べる所は、三類九法の法門以外にはない。この下の菩薩は淨土の菩薩であるが、淨土の菩薩とは、如來の本願力の外にない。親鸞が出入二門偈に於いて、原理的

に之を法藏菩薩と見られることも、深い見方と言わねばならぬ。かく思うと曇鸞の利他の深義が生れて來るのは、この法門が深い關係をもつていたと言えないであらうか。私は以下項を改めて、この法門に就いて考え度い。

二

吾々の茲に問題とする善巧攝化以下名義攝對までの論文は、五念門行の第五廻向門即ち自利門に對する利他門に當るものである。天親菩薩は、善巧攝化章の初めに、如^レ是菩薩、奢摩多毘婆舍那廣略修行成^ニ就柔軟心、如^レ實知^ニ廣略諸法。如^レ是成^ニ就巧方便廻向^一。と云う。この論文には、云うまでもなく五念門の中、作願・觀察の二門が直接に出されてあるが、禮拜・讚嘆の二門をも、包攝せしめていると見てよいであらう。かく見れば、上四門の到達點は、止觀不二の柔軟心の智慧である。この智慧から、巧方便廻向の利他門が展開せられて來るのである。

第五廻向門は、偈の普共^ニ諸衆生^一・往^ニ生安樂國^一にあたる。偈頌の語は、極めて簡單であるが、それが長行に至ると、善巧攝化・障菩提門・順菩提門・名義攝對と非常

に詳細に分析せられて説きあかしてある。一見、煩瑣法門の觀がある。しかし吾々の思うべきは、ただ自己一人のためでなく一切衆生と共に淨土に往生し度いと言う願往生心を、何故かく複雑に説かざるを得なかつたのか、天親菩薩の心中をよく窺わねばならぬ。古來この下の敘述内容を、三類九法と言う。三類とは、善巧攝化章の智慧・慈悲・方便の三門と、菩提を障げる貧著自身心・無安衆生心・自供養心を否定する三遠離心と、菩提に順ずる無染清淨心・安清淨心・樂清淨心の三清淨心とである。この三類は、各々三箇に分かれてあるから九法になる。

第五廻向門の意味を明かにせんとして、かく三類九法の名目が開設せられたが、終りには、開いたものをその意味に依つて逆に四心にまとめられてある。四心とは三門の般若と方便、三遠離心の無障心、三清淨心の妙樂勝真心である。吾々のここで考え度いことは、先ず第一に、巧方便廻向を三類九法として何處から開設したのか。第二に、それを三類九法に開いた意圖は何んであるか。第三に、開いた三類九法を四心に統攝する趣旨は何んであるか。と言うこと、これらの意味を検討しなければならぬ。

先ず初めに、三類九法を何處から開設したか。それは

善巧攝化章からである。天親菩薩は、此の章の中に、菩薩巧方便廻向者、謂説禮拜等五種修行所集一切功德善根、不求自身住持之樂、欲拔一切衆生苦故、作願攝取一切衆生共同生彼安樂佛國。是名菩薩巧方便廻向成就。と述べているが、詳略の差はあるが、偈の普共諸衆生往生安樂國と同じである。吾々は、この文と三類九法とを照合すると、その關連と開設を知ることが出来る。例えば智慧・慈悲・方便の三門中、智慧門は此の文の不求自身住持之樂の語に、慈悲門は同釋の欲拔一切衆生苦故の語に、又方便門は同釋の作願：彼安樂國の語によることは明かである。障菩提門の三遠離心も順菩提門の三清淨心も、同じく善巧攝化章の文より開いたことは、兩者の照合に於いて明かである。されば、三類九法の法門は善巧攝化章の展開であると言える。

第二に考えねばならぬ問題は、巧方便廻向を三類九法と言うが如き煩瑣な分析を、何故したのかと言うことである。それは、天親菩薩の宗教的要求否人間の宗教的要求が、自利利他満足の普遍的要求、言い換えると淨土の大菩提心に純化せらねばらんことを言わんとするのである。宗教的要求が大菩提心に純化せられるには、自と他との間を隔てる障りとなるものが、中心の問題とせ

られねばならぬ。前にも觸れた如く、自利の問題が徹底するのは、自利よりは起らず利他からでなければならぬ。巧方便廻向の智慧・慈悲・方便の三門より障菩提門順菩提門が開かれて来るのは、利他を問題とすることに依つて、自利が本當の現實の問題となつて来ることを意味するのであらう。利他を媒介とすることに依つて、菩提を障うる法として自利が否定されねばならぬ。利他を媒介としない單なる自利は、佛力に結びついたものでない。夫故、單なる自利は障菩提相違の法となる。天親菩薩は、障菩提法の根本を我心貧著自身と述べている。この語は、前の善巧攝化章の自身住持之樂を求める根本因を擧げたのである。

この語より思い出されて来ることは、四十八願中の第十願、設我得^レ佛國中^ニ人天若起^ニ想念^ヲ一貧^ニ計^{セバ}身^者不^レ取^ニ正覺^ヲである。古來より漏盡通の願と呼ぶ。天親菩薩は、此の本願に照らされて利他を障うる法を記述せられたかは、吾々の與り知られる所ではないが、本願には貧計身とあり、論には我心貧著自身とある。吾々は有限の身の故に、何時の間にか無始的に我心貧著自身の抜き去り難き迷妄の深淵に陥つている。ここから、菩提を障える自身住持の樂を求める、淨土門に於ける危難が起つて

来る。

吾々の茲に注意し度いことは、天親菩薩は五念門を説く中、前四門に於いては菩提心の問題に觸れないで、第五廻向門に於いて之を取り擧げていることである。曇鸞大師も、天親の意を得て善巧攝化章の註に於いて、大無量壽經三輩生の無上菩提心を引證して、此無上菩提心即是願作佛心。願作佛心即是度衆生心。度衆生心即是攝^ニ取^ニ衆生^ニ生^ニ有佛國土^ニ心。是故願^ニ生^ニ彼安樂淨土^ニ者要發^ニ無上菩提心^ニ也。云々と釋している。菩提心の問題は、吾々の自利利他の問題である。利他を通らない自利は、眞實の自利でない。願作佛心は度衆生心を通じて、眞實の願作佛心となる。若し吾々の願作佛心が自己の小天地に閉じこもつて單なる自利門に終るとき、樂を受けること間なきをきいて自樂を求むる二乘地に墮する。これ利他を通らない自利門である。聖道門の菩薩が第七地に達しても尙沈空の難がある如く、淨土の五念門の行に於いても、自利門のみでは自樂の難がある。天親菩薩は、不虛作住功德に於いて、見佛に依つて初地より七地までの未證淨心の菩薩が第八地の淨心の菩薩となると述べて居られる所に、既にこの難のあることを感じて居られるのであらう。この菩提を障える法を智慧・慈悲・方便の

三門で開くと我心貧著自身・無安衆生心・自供養心となり、之を超える所に無染・安・樂の三清淨心となる。このように廻向門を詳細に分析したのは、願生心が自利利他成滿する淨土の大菩提心でなければならぬことを論述したものであらう。

第三に、吾々の問題とする所は、一つの巧方便廻向を三類九法に開いたが、それを又何のために、四心にまとめたかと言うことである。三類九法に開いたのは宗教的要求の純化にあつたが、四心にまとめる趣旨は、諸衆生と共に安樂淨土へ往生せんとする如來の巧方便廻向の行相を彰わさんとするものであらう。

私はここで方便の語に注意しよう。この語は、論に於いては第五廻向門に於いて用いられてある。巧方便廻向とあるが、方便とは、佛菩薩の廻向心の窮極する所と言えようか。天親菩薩は、この廻向心を三門に開いて智慧・慈悲・方便とするが、これらをまとめるときは、前二門を方便の中に攝めてしまう。このように方便の語は、論にあつては非常に重要な意味をもつ。方便とは、天親菩薩は偈では普共諸衆生往生安樂國、長行では以レ令_ル三一切衆生得_テ大菩提_ヲ故。以_レ攝_ニ取衆生_ニ生_シ中_ヲ彼國土_ニ故_ヲと言っている。人間が人間となるには、吾々の述

べ來つたように淨土に生れる外に道はないから、如來の方便は衆生を淨土に生れしめることとなるのである。天親の方便の意味を一層明瞭にせられたのは、曇鸞大師の功である。大師は論の一法句、平等法身、或いは第一義諦妙境界相及び方便の語に依つて、阿彌陀如來を法性方便の二身觀を以て註釋せられた。但、この方便は、權化の方便ではなくして法性に對して方便である。

如來は衆生を離れてないから、衆生を淨土に生れしめる如來の巧方便廻向の行相は、衆生の上に展開するものでなければならぬ。この展開相を説くものが四心である。天親菩薩の説き方は、淨土の菩薩に於いて展開せられるのであるが、併し淨土の菩薩の力用は、如來の本願力の外にない。ここから、親鸞は入出二門偈では、之を法藏菩薩の四心と見られる。吾々の意もこれによるものである。

私は四心の展開相に就いて、詳述する要がある。天親菩薩は智慧・慈悲・方便三種門攝_ニ取_ス般若_ヲ。般若攝_ニ取_ス方便_ヲ。と言ひ、曇鸞大師は般若者_ト、達_スレ如之慧名_ヲ。方便者通_スレ權之智稱_ヲ。と註釋せられる。古來三門は、權智に屬するものと釋せられてあるが、曇鸞大師が障菩提門の下で知_テ進_ム守_ル退_ク曰_ク智_ト、知_ル空無我_ヲ曰_ク慧_ト。として、智と

慧とを別釋する所より見ると、權智としての三門の根源は根本の慧であつて、慧より權智の生ずることを知る。

されば、三門は權智に相違ないが、慧と切り離して考へはならぬ。權智は慧の中のもの、それより出ずるものである。故に、三門を般若と方便としてまとめるのである。

が、その萌芽は、既に障菩提門の中にある。更らに遡れば善巧攝化章の廣略修行成^{シテ}就柔軟心^ス、如^ク實知^ス廣略諸法^ニ。如^ク是成^ス就巧方便廻向^ヲが、その據所であると言えよう。かく見れば、般若より方便は生じ方便は般若を出す意味となつて、淨入願心章の二法身觀と同じ考え方である。曇鸞大師が、方便を釋して正直^ヲ曰^フ、外^ニレ己^ニ曰^フ便。

と言うも同義であらう。故に、願生淨土の宗教的要求は、個人的制約の障を超えた大菩提心に純化せられねばならぬ。茲に、巧方便廻向心は無障心でなければならぬ。併し、無障心は單に無障心として留まるならば、巧方便廻向の意味は成就しない。夫故、無障心は更らに展開して、妙樂勝眞心とならねばならぬ。妙樂勝眞心とは、元より三清淨心（無染・安・樂）をまとめたものである。この四心のまとめ方に注意すると、前に三門のまとめ方が方便であつたように、三清淨心のまとめ方も三門の場合と同じく無染・安・樂の三清淨心の中第三の樂

清淨心に、前二心が攝められている。これは、何を彰わさんとするのであらうか。恐らくは、人間は淨土に生れる方便の外に人間になれないことを意味せしめんとし、樂清淨心に他の二心を包んで、之を妙樂勝眞心と名づけたのであらう。

吾々の茲に考へねばならぬことは、三遠離心即無障心と三清淨心即妙樂勝眞心との關係である。曇鸞大師は、名義攝對章の終りに、是遠離我心・遠離無安衆生心・遠離自供養心^ヲ。是三種心清淨^ニ。増進^{シテ}略爲^ス妙樂勝眞心^トと釋して、兩者の關係を明かにしている。これによると、無障心と妙樂勝眞心とは元より別體のものではなくして、同一の如來の廻向心であるが、只その向う所を異にするから、名目が變るのである。巧方便廻向心が生死界に入つて菩提の障を人間の上に見出し、之を超えている所が無障心である。無障心とは、自力の修行に依つて菩提を障うる法を斷じたと言う如き聖道門の無障心ではなくして、人間を照らす如より來る清淨願心である。夫故、更らに増進して障りを包んで如來の淨土へ諸衆生と共に向うのが、妙樂勝眞心である。この意味を曇鸞大師は、是三種の心清淨にして増進するを略して妙樂勝眞心と爲すなりと、言われたのであらう。私は清淨の文字に

着眼しよう。論に清淨の文字の用いてあるのは、佛と菩薩に關してである。偈頌には、清淨智海又は安樂國清淨とある。解義分には、五念門の自利門にあつては、一者莊嚴清淨功德成就一法句者清淨句等とある。利他門は、今の三種清淨心である。論の意からは、菩薩の清淨心は如來の清淨心である。惟うに、清淨の本は一法句にあるが、これは絶對にして名づけようもないものである。しかし、一度人間の生の中に廻入すると、人間の汚染に對して清淨となる。しかも、如來の清淨は、單なる相對的清淨ではなくして、相對にして絶對である。斯ういう意味をもつものが、如來の清淨である。吾々は、この清淨の文字が使用してある中に、如來の清淨願心を見るのである。

この妙樂勝眞心は三類九法の歸結であつて、天親菩薩の論では重要な語である。今之を五念門の行第五廻向門から考へてみると、偈の普共諸衆往生安樂國となる。天親菩薩が菩薩の巧方便廻向の歸結を妙樂勝眞心と名けた據所は、既に述べた如く三清淨心の樂清淨心である。妙と樂と勝と眞のうち、中心となるものと言うまでもなく樂である。樂とは、人間の感覺的快樂でもなければ、又感覺的欲望を刺戟する對象界より離れた靜かな境地を樂

しむと言うのでもない。佛の眞實功德を緣じて生じる樂である。故に、この樂は又願生安樂の樂である。淨土の樂は如來の無漏清淨の大願業力の所成であるから、如來の大悲心は人間の虛妄の初發相を照らして無障心となり、無障心は清淨心に増進して、最後の目標である淨土へ歸り行かんとする。吾々は、三清淨心の初めの無染の染の文字にも注意すべきでないか。清淨心とは、既に言つた如く如來の淨土建立の原理としての清淨願心であるから、障りが之に對して染となる。貧著自身心のみが染でなく、無安衆生心も自供養心も共に染である。智慧より生ずる慈悲が人間界に作用くと、必ず清淨と染との二相的矛盾となる。一如の大悲心は、この二相的矛盾の選擇の批判に於いて、人間を淨土へ攝取するのである。故に、妙も勝も眞も樂の深義を顯わさんとする語である。本を失える人間に、個人的の自樂ではなく眞實の樂を得さしめる如來廻向の大悲心が、人間の上に妙樂勝眞心となると言える。如來の大悲方便の窮極は、何故妙樂勝眞心とならねばならぬのか。曇鸞大師は、善巧攝化章の註に彼佛國即是畢竟成佛道路、無上方便也。と言ひ、又順菩提門には菩提是畢竟常樂處……此畢竟常樂依何而得、依大乘門、大乘門者、謂彼安樂佛國土是也。と言

う。これらの語によつて知られることは、相對の有に落ちこんでいる人間を絕對の無相の一如の世界に歸らしめるには、選擇本願を通つてその淨土へ往生せしめる外にはない。故に、如來の巧方便廻向心即如來の清淨願心は、煩瑣な三類九法の法門を通つて妙樂勝眞心に極らざるを得ないのである。

天親菩薩は、願事成就章に如^レ是菩薩智惠心・方便心・無障心・妙樂勝眞心^{ヲシテ}能生^ク清淨^ノ佛國土^ニ、應^レ知。と述べているが、元よりばらばらの四心によつて淨土に生れるのではなく、如來の智慧心が生死界に入りて方便心となり、方便心は菩提を障える生死の根源を照らして無障心となり、無障心となることに依つて一切衆生を攝取して、安樂國に生ぜしめる妙樂勝眞心となる。この故に、人間は始めて清淨佛國土に生れしめられるのである。この天親の文は、三類九法に述べ來たつた所の如來の廻向の展開相を結んだものと言えよう。

私は、上に妙樂勝眞心は廻向門の歸結であると言つたが、歸結の意味を考えねばならぬ。それは、この眞心は單に廻向門の歸結ではなくして、五念門の歸結更らに言う^うと如來の眞實功德相に相應せんとする一論の歸結だからである。しばしば繰り返して言つた如く、この眞心

は偈頌の普共諸衆生往生安樂國である。眞心がこの偈頌の終りの語に相當することが、何故一論の歸結となるのであろうか。吾々は、天親菩薩の普く諸々の衆生と共にと言う語を、ややともすると輕るく看過する嫌がないであらうか。三類九法の煩瑣法門を通うて普共諸衆生を再び讀むとき、天親菩薩が偈の終りにこの語をおかれたことは、單なる偈を結ぶ形式的なものでなく、如來の大悲の本願にふれることに依つて、普く諸々の衆生と共に安樂國に往生せんと叫ばれるようになった自分に、感銘おく能わずして盡きぬ宗教的感激に浸つて居られることが思われる。天親の妙樂勝眞心から五念門を見ると、前四門は自利第五門は利他と、二箇が並列しているのではなくして、第五廻向門を通ることに依つて前四門の自利的願生が自樂を求める大難關を超えて、眞實の願生心となる。曇鸞大師は、前四門の願生心を解して自利に由るが故に則ち能く利他する。否定的には、自利に能はずしては能く利他するに非ずと註し、第五廻向門にあつては利他に由るが故に則ち能く自利す。否定的には、利他に能はずして能く自利するに非ずと釋している。これらは、一見繰り返えしの如く見えるが、天親を得た曇鸞の意は、自利は必ず利他を通ることに依つて、(41頁へ)

しない。

龍樹を創始者とする二諦説が、中觀教學の大成者と稱せらるる月稱をその完成者とすることは當然のことと云えよう。西藏の傳承は龍樹と月稱の地位を次のように表現している。「中論は小乘的な有の世界を否定して、専ら空性勝義の、いわば、悟りの内容を伝えることを主題とし、入中論は空性の悟入から却つて世俗的な有の世界の安立への理路を開くものである」^①。

このように月稱は世俗の安立に力を致したのであるが、然し尙そこに「中觀學派は世間と出世間との間の入出往還の道を施設せずして、緣起せる五蘊諸法の上に世間性を許し、そして、それが有と執ぜらるる増益相の故に、それを遮遣する點に勝義性を立てんとした。それは世間と勝義との隔歴せらるる難なきを得ず」^②と云う識論者に加えられた批評が、そのまま今の月稱の所論にも適用せらるることが上に述べた二諦説より察知せられる。

その故は、月稱が世間性を吟味考察して、そこに世俗諦を建立したとは謂え、その世俗諦を龍樹と同じく緣起の理を以てする限り、前にも述べた通り、それは遮遣の場の設定であつて、眞の意味での世俗の安立とならない。とは云え、それはブラーサンギカ中觀説の大成者とし

て、龍樹提婆佛護の傳統を忠實に繼承する月稱にとつては止む得ざることと云わねばならないであろう。

かかる難點が存することは謂へ、二諦説について月稱の果した役割は誠に大なるものであつたと云うべきである。

註① 哲學研究 三七〇號二〇頁。

② 「無と有との對論」三三九頁。

(15頁より)

自他の矛盾に撞着し之を超えて自他一體の如來の願心に至ることを彰わさんとするのであろう。天親菩薩は、論に於いて我一心は單なる自利的一心ではなくして、五念門の行を以つて自利より利他を経て自利利他圓滿する大菩提心なることを開示して、妙樂勝眞心と言われたのであろう。